

30

寿閑系の鍼術流派の分派活動について

長野 仁

森ノ宮医療大学大学院

近世日本における鍼灸の隆盛を象徴する出来事として、鍼術を主体とする「流派」の盛んな分派活動が挙げられる。しかし、流派は他流に対する「当流」の優位性を誇張せんがために、得てして「加上」工作によって師承関係を濁らせ、時系列を狂わせる。浅田宗伯や富士川游でさえ疑わなかった序跋の虚飾を見破るには、郷土史料の精査はもちろん、私蔵・死蔵の流儀書を捜求して披見数をできる限り増やし、流儀書群の本文を丹念に比較し、流儀の伝播の前後関係を炙り出し、そこから師承関係を洞察するしか術はない。

かかる方法によって、演者はこれまでに、1600年前後に存在した針得系（今新流・入江流）／意齋系（法印流・松岡流・小川流・路針流）／琢周系（匹地流・吉田流）にまつわる疑義を解明してきた。ここでは、①扁鵲流・①'扁心一流・②扁鵲新流・②'扁鵲真流・③新迦外流（旧称：新針流）の流儀書から窺われる、寿閑系の師匠関係について考察したい。

共に扁鵲を冠する①と②は、①が先発で②が後発の連続した系統と捉えるのが自然である。①-④森ノ宮本『扁鵲流秘伝鍼之書』は、料紙と字様から文禄慶長間の古写本と見られるものの、開祖も門弟も記さない。いっぽう②の現存書を整理すると、初伝⑥『扁鵲新流鍼書』・中伝⑦『新撰小銅人略図』・別伝⑧『諸灸捷歌』・奥伝⑨『鍼之極意切紙』の4部で構成されている。初伝⑥の跋には、奥州九部（九戸：くのへ）住人の越齋寿閑から村井四郎右衛門尉之子（ゆきざね？これつぐ？）が慶長12年（1607）以前に伝授された旨が記されている。この②-⑥は、今新流の『針聞書』冒頭の97ヶ条の口伝を改編のうえ104～105ヶ条に増補したもので、①-④とは直接的な関係はない。ところが、中伝の②-⑦は、①-④を『十四経』に依って翌13年（1608）に「新撰」したものと審定できるから、①と②の連続性は担保される。素直に考えれば、①の開祖は越齋寿閑で、①を継承し②を新興したのが村井之子ということになる。

②-⑦の書名は、明らかに曲直瀬流の『切紙』を意識したもので、『難経俗解』の七十一～七十四難の本文と熊宗立注、および『医学源流』の徐文伯の挿話を転載している。②-④『黄帝明堂灸経』の主治と穴位を和歌で詠み直したものだ（岡山県総社市・石堂智行氏の発見）、これも曲直瀬流の書目選定といえる。つまり、①を興した鍼立の越齋寿閑に就いた村井之子は、並行して曲直瀬流の医師にも学び、流儀書を整備したと理解される。しかも、村井之子は慶長16年（1611）に②を②'と改称し、師祖・寿閑の存在を掻き消して「従大唐渡実管云者」に伝授されたと自ら加上に手を染めるのだが、中国ブランドを重んじるのも曲直瀬流の風潮といえよう。しかも、ジュカンとジッカンの酷似した音感に、大陸の実管が来朝後に寿閑と改めたと強弁できる余地を残す周到ぶりである。①-④内藤本『針別伝奥義之次第』は、①-④の解説書（抄物）であるが、書式から寛永頃の成立と目されるので、受鍼感覚を表現する「ヒビキ（響）」の初出文献という別の価値を有する。ちなみに、①-④と①-⑦の関係は、『大明琢周鍼法一軸』と『大明琢周鍼法鈔』の関係と同様である。

③-⑧浜松本『新迦外流家伝明鍼』は元和4年（1618）の古写本で、師承関係の記載はないものの、①-④の主要条文を和歌で詠み直した部分を骨子とするので、③は①の分派と位置づけられる。①はその後、山崎重孝が万治元年（1659）に①'と改称した辺りで失速してしまうが（⑥東大本『扁心一流之秘伝書』）、ちょうど中国鍼灸書が大量に和刻された時期と重なる。それは、扁鵲への仮託が圧倒的な情報量の前に無力化し、寿閑の威光も半世紀以上を経て消え失せてしまったことを物語っている。